



# 人生100年時代は「教育費負担VS老後生活費の確保」

## 老後破産を回避するために、どこまで教育費を負担するのか？

子どもの教育費負担を考えると、親はその総額を負担することを前提に自身のライフプランを組み立てようと思います。第1回「子どもの教育費は親のライフプランに組み込むべきもの」で述べたように、高校までの教育費は親の定期収入で負担して当然と考えていいでしょう。

**高校卒業以降の高等教育機関である大学や専門学校への進学率は約7割。**高校への進学率ほどではないにしろ、多くの子どもに教育費がかかることになりましたが、こちらは定期収入でまかなうには高額です。

そのため、子どもが生まれてからコツコツ貯める必要があるわけで、**私立大学文系の4年間分+aの500万円を目標とする**のが妥当です。子どもの教育費をすべて負担しようと考えてるのであれば、この高等教育の費用の準備をしなければなりません。

用意できない場合の教育ローンや奨学金の利用については第2回「貸与型奨学金の

利用は想定外を想定して」に書きましたが、中には、親が返済を丸抱えしてしまったり自身の生活が苦しくなるケースも見受けられます。親の生活を守ることと教育費負担を両立できるとは限りません。**親自身が両立の難しさを早めに認識すれば、新たな選択肢を見つめる可能性を広げられるでしょう。**

**環境の変化を数字で理解できているか**

人生100年時代という言葉が珍しくなくなってきました。親戚やご近所を見渡すと、100歳を迎えた人や迎えそうな人が何人もいるのではないのでしょうか。

1989（平成元）年と2018（平成30）年を比べると、後期高齢者と呼ばれる75歳以上の人口は3.13倍になりました【図表1】。「人口推計」（総務省）に「100歳以上」という年齢階級が設けられた2005（平成17）年と2018年では、100



菅原 直子

らいふでざいん菅原おふいす代表

【すがわら・なおこ】

教育資金コンサルタント。1997年よりファイナンシャルプランナー。学校や地方自治体、企業等での進学資金・ライフプラン講座にて子育て世帯にかかせないお金の知識をわかりやすく解説。高校生向けの奨学金セミナーや新聞・雑誌等に教育費に関するコメント・執筆も。「子どもにけるお金を考える会」「働けない子どものお金を考える会」メンバー。

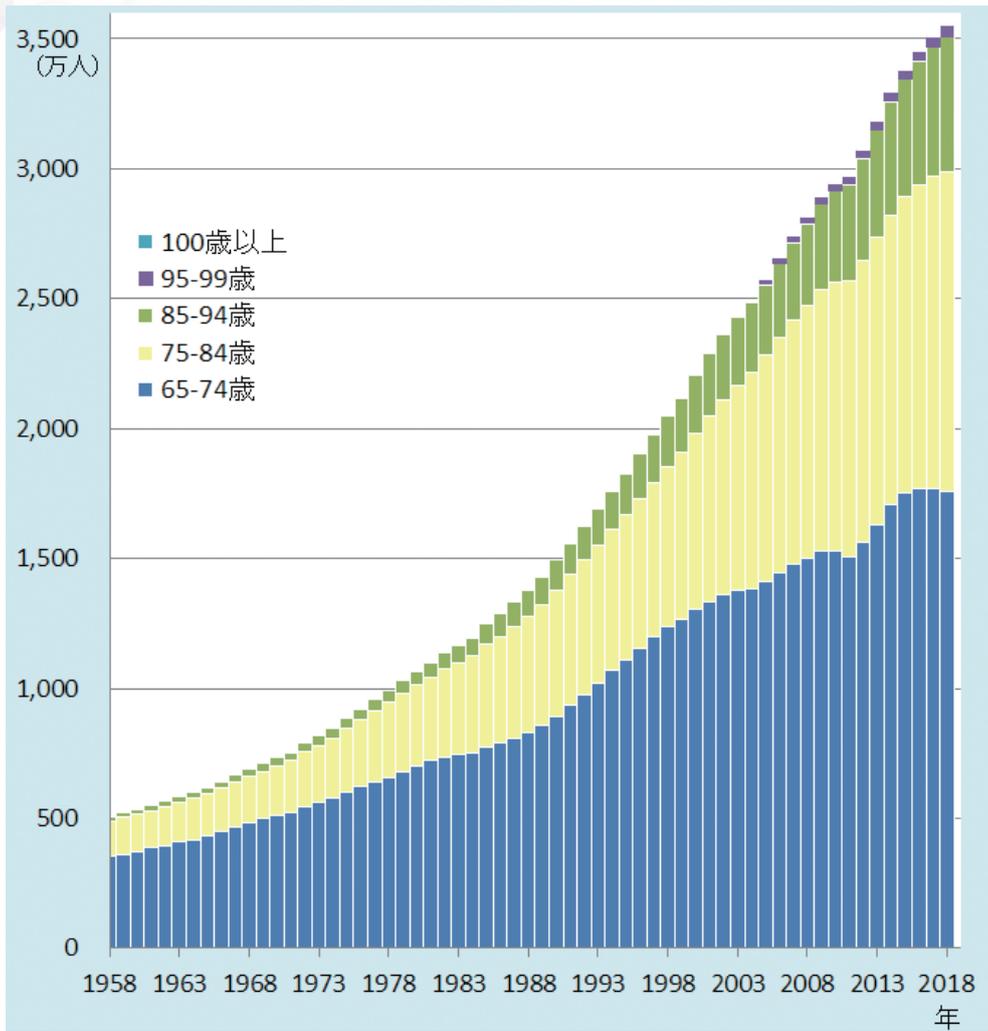
歳以上の人口は2.76倍になっています。単なるイメージではなく、統計の数字からも長生きの人が増えていることがわかります。そして、自分もその一人になる可能性は十分あるのです。

一方、老後の生活を支える退職金の額は減少傾向です。5年ごとに行われる「就労条件総合調査」（厚生労働省）によると、300人〜999人の企業規模の場合、大学卒業者の定年退職金は2003年の2499万円から、2018年の1983万円と、約2割少なくなっています【図表2】。

生活する年月は長くなっているのに、使えるお金は少なくなっているのです。必要とする老後生活資金をあらかじめ算出し、退職金と公的年金で不足するようであれば、不足分を埋めるだけの貯蓄を増やすか、老後生活費を切り詰めることとなります。

ライフプランの時間軸上で、教育資金と老後生活資金を準備する期間が短かったり

【図表1】65歳以上の人口の推移



出典：「人口推計」（総務省） ※ 2004年までは「85-94歳」の総数に「95-99歳」「100歳以上」を含む

【図表2】定年退職金の推移



出典：「就労条件総合調査」（厚生労働省） ※ 「大学・大学院卒」は管理・事務・技術職、中学卒は現業職

重なるようであれば、日々の生活費をまかないながらの貯蓄や投資は簡単ではありません。早急に、親と子のライフプランを確かめてみましょう。支出の種類と時期、支出希望額と用意できる額をチェックし、用意できる金額が支出額を下回る時期があったり、預貯金が希望どおりに増えなければ、対応策の検討に入ります。

教育ローンと奨学金の返済が親の老後生活費を食いつぶす

50代後半のDさんは、3人の子を持つ父親です。Dさん自身が高校生の頃、大学進学を希望したものの経済的な理由で断念。高校卒業後に就職した会社に今も勤めていますが、大卒の同僚は最初から給料が高く、

学歴の差を感じ続けています。大学進学によって経済的なゆとりを持ってそうに思えることもあり、子どもたちが進学を希望するのなら絶対に応援したいと考えてきました。子どもは全員が進学を希望し、長子は看護系の私立大学を卒業して系列の総合病院に就職しました。次子は親に負担をかけたくないと国立大学1本に絞って受験しました



### 【図表3】Dさん（50代後半）の子どもの高等教育費の状況

- ◆長子…看護系の私立大学（入学時に教育ローン100万円＋在学中は貸与型奨学金。貸与型奨学金の返済は親がすると約束）
- ◆次子…国立大学を受験→不合格→予備校に通学中。大学進学用に貯めた100万円が予備校代に。今後、私立大学進学の可能性も。
- ◆末子…医大を希望している。現在の成績では国立医大への進学は難しい。私立医大へ進学した場合、学費を負担できるか？

\*退職金…2000万円はあるだろうと思っていたが、実際は1500万円程度であることが判明。

\*住宅ローンの返済と中学・高校の塾代などの負担で大学進学資金を十分に貯められず。

が結果が伴わず、現在は自宅から予備校に通っています。末子は公立高校に在学中で、急に医大を目指したいと言いつつ始め、Dさん夫婦は戸惑っているところです【図表3】。

実は、住宅ローンの返済と中学・高校の塾代などの負担で大学進学資金を十分に貯めることができず、長子の大学入学時には教育ローンで100万円を借り入れました。長子自身には教育ローンよりも金利の低かった貸与型奨学金を借りてもらい、Dさんが返済する約束です。奨学金の一部は、看護師として7年間勤務すると返済免除になります。それを差し引いても200万円ほどの負担になります。

次子の予備校代は想定外でした。長子の進学時と同じように教育ローンを組むことになったら大変と、頑張つて貯めた100万円は予備校代に消えてしまいました。1年間だけの浪人で国立大に合格する保証はなく、私立大に進学することになれば、手持ち資金は足りません。

末子の医大進学希望は、現役で国立大に行つてくれれば何とかかなとも考えられますが、現在の成績では難しいようです。努力するという言葉を感じたい気持ちと、私立医大でも応援するのか、応援できるのかとDさんの気持ちは揺れています。

それでも、子どもの教育費を負担するのは親の務めと考えているDさんには、お金のアテが一つありました。数年後の退職金です。

バブルの頃、退職していった人たちの退職金額はとも景気のいいものでした。今はさすがにその頃と同じ金額はもらえないだろうけれども、3000万円は無理でも2000万円はあるだろう、いや2500万円くらいか…と想像と希望が入り混じった金額を思い浮かべて、奨学金と教育ローンの返済にいくら、住宅と車のローンの繰上返済にいくらと心の中でシミュレーションを繰り返していました。

ところが、勤務先でのリタイアメントプランセミナーで具体的な退職金額を知つて、頭を抱えることになりました。退職一時金は1500万円ほど。住宅ローンの残債と、長子分の借金返済で1000万円が消え、次子が私立大に進学したら残りもなくなつてしまいます。末子分の教育資金を自己資金で用意することはできなくなりました。

長子に奨学金の返済は親がすると約束をした以上、次子と末子にも同様にすべきと考えています。末子が私立医大に進学したらどういふことになるのか不安でなりません。それに、自分たち夫婦の老後生活費が公的年金だけでは足りそうもなく、不安は大きくなる一方です。

#### 保護者自身の気持ちと 財布事情は早めに整理

Dさんは、子どもが経済的な力を持てる就職への近道と考えて、大学進学を後押ししてきました。子どもへの気持ちや希望は

自然なもので、否定する必要はありません。

ただ、**進学を後押しするのであれば、高校までとは異なる高額な教育費を、あらかじめ準備すべき**でした。用意してやれなかった場合でも進学をさせるのか、用意できた範囲での進学先に限定するのか、子どもの進路と出してやれるお金の関係について十分に検討することが重要です。何より、退職金の額は、古い情報で想像しているだけでなく、確かな数字を早めに調べなくてはなりません。もらえない金額をアテにした進学プランのせいでも、さらに大きな借金を背負おうとしているのです。

**教育ローンや奨学金などの借金を安易に重ねずにすむ選択肢について、社会経験の豊富な親こそが、まずは考えておきたい**ものです。

#### 子どもの意見も聞き、保護者の 気持ちと財布事情を伝える

多くの場合、子どもが家計の状況を正しく把握する機会はありません。子どもに無駄遣いをさせたくなくて「うちにお金は少ない」と言ってみたり、子どもを不安にさせたくなくて「お金の心配はしなくて大丈夫」と言ってみたり、真実を伝えたい親はいくらでもあります。まして、預金通帳や住宅ローンの返済表など資産状況の詳細を子どもにすべて見せる親はいないと言ってもいいでしょう。

家計のすべてを子どもに公開できなくて

もかまいません。教育費に限定してどこまで援助できて、どこからはできないということを伝えればいいのです。空気や顔色や言葉の裏側を子どもに読んでもらおうと期待するのは、親の甘えです。

親の事情や気持ち伝えるときには、当然、子どもの考えていることにも耳を傾けます。進学したい理由によって援助できる金額が変わることもあるでしょう。子どもが100%納得できる理由でなくても、理解を示してくれる話し合いになるように、親も折り合いをつける努力をしましょう。子どもをおどすような伝え方にならないように配慮しつつ、教育資金を負担することと親の老後資金が足りなくなれば、いずれ子どもに経済的援助を頼む可能性が高まる、ということも話しておくといいでしょう。

### 親のプライドや見栄は脇において

一番やってはいけないことは、**負担できそうもないお金を「出してやれる」と言っ**て子どもに期待をさせ、**土壇場になって「やっぱり払えない」と撤回すること**です。

親に用意してもらえないと早い時期にわかっていたら、子どもは自分の進路をそれなりに選び取ろうとします。覚悟して貸与型奨学金を利用するのであれば、返済を簡単に滞らせることもないでしょう。

けれど、「親が返済してあげるから、とりあえず借りて」などと言ってしまうと、子

どもから「進学を諦める選択肢」や「返済する覚悟」を取り上げることになってしまいます。お金の面でできることと、できないことを、親自身はつきりと理解して、その場限りの甘い言葉を発しないことは、とても重要なことなのです。

ちなみに、Dさんの妻はパートタイマーとして扶養の範囲で働いてきましたが、老後生活費を増やすためにフルタイムへと働き方の変更を検討しています。ただ、同じ職場での働き方の変更は難しく、体力が下降気味の50代の今、転職も簡単ではないと感じています。簡単に収入を増やせない50代の現状も、子どもに心配をかけすぎない範囲で伝えましょう。

### 親子のキャッシュフロー表をいっしょに作ろう

子どもが生まれたとき、その後の家計についていろいろ考えたことでしょうか。家計は予想どおりに推移しているでしょうか。必要な金額は、必要とする時期までに、確実に用意できているでしょうか。

**子どもの教育にかかるお金は、資金を用意する親の希望どおりにはいかないことも多い**ものです。公立高校の予定が私立高校になったり、現役で大学進学させる予定が浪人して予備校に通うことになったりと、支出がふくらむのはよくあることです。

教育費がふくらむことを「仕方ない」と認めれば、他の何かが影響を受けます。支

出が増えたとしても、連動して収入も増えるわけではないからです。

**教育費に糸目をつけずに支払いを続ける**と、**大きな影響を受けることになるのが、親の老後生活費**です。子育て中の住宅費や食費、通信費などの基本生活費の見直しは簡単ではないとはいえ、教育費分を吸収できなければ、それらの支出の積み重ねは先送りされます。

貯蓄できないまま、最後の大きな収入である退職金を取り崩して先送りされた支出と相殺すれば、本来、老後生活費に充てるはずだったお金が足りなくなるのは当然です。

**将来のわが家のお金の増減がどのようになるのか、目で見える形に表してみま**しょう。教育費を出し惜しみすることではありません。必ず親が負担してやるべきお金と、親の最低限の生活を確保できたら上乗せで出してやるお金の区別をつけるためです。子どもの教育費を頑張つて負担したとしても、その後に親の家計が破たんしてしまえば、結局、子どもを頼ることになりかねません。

**どこまでを親の負担とするのかを決めるために、親子で情報を共有して具体的な数字で考えるためのツールがキャッシュフロー表**になります。

本格的なものは物価変動率なども加味しますが、とりあえずは「現在価値」でのキャッシュフロー表を作ってみましょう。十分、参考になるはずですよ。